

「世界の中心を見せたい」純愛ゆえの行動が白血病死の原因

映画・医療ライター 小 守 ケ イ

「テープに気持を吹き込み合わない?」。クラスのマドンナ、亜紀の言葉に朔太郎は「告白します! 付き合ってください」。86年初夏、高松市。海辺を歩く二人は高校2年の同級生。ラブレター代わりのテープ交換で愛を育む。

ところが夏休みの或る日、亜紀が突然立ちくらみ、鼻血を流し倒れてしまう。「白血病で入院よ。負けないわ。」と言うが、秋になると化学療法の副作用で髪が抜け、顔も手も貧血で真っ白になる。無菌室に移された亜紀は、入院中の母親の見舞いに来る9歳の女子小学生にテープを朔太郎の高校の下駄箱に運んで貰い、変らぬ愛を確かめ合う。

やがて10月末、死を予感した亜紀は「もう会わないほうがいいわ。でも貴方は私の宝物。会えて幸せだったわ。人生をしっかりと生きてね。」という朔太郎への最後のテープをその小学生に頼む。しかし、その子は車に撥ねられ救急車へ。テープは朔太郎に渡らなかった。

泣いて癒されドナー登録急増

原作は白血病に引き裂かれた二人の純愛を描く小説(片山恭一著)だが、映画は34歳になった朔太郎が過去と現在を行き来しながら、亜紀の死で抱えた喪失感から蘇える物語だ。彼の再生

を助けるのは、東京で偶然出会った律子という26歳の女性——朔太郎も律子も互いの関係を知らないが、亜紀が入院中にテープを託した小学生——との愛。律子から亜紀の最後のテープを受け取った朔太郎は、なぜ亜紀が自分に会わずに死んでいったのかを知って長年の苦悩から解放され、律子との愛を実らせる。監督・脚本は行定勲。主演は、朔太郎の高校時代を守山未来、成人後を大沢たかお、亜紀を長澤まさみ、律子を柴咲コウ。

本作は、“映画で泣く”がブームの中、公開後半年で観客数が600万人を越えた最強の“泣かせ映画”。お陰で優しい気持ちになる人が続出したのだろう、翌年には骨髄移植バンクへのドナー

登録が例年の3倍にも及び、バンク発足以来の目標だった30万人達成に大きく貢献したという。ということは医療の面でも有意義な映画であるのだが、白血病の扱いには後述のように不適切な場面もみられる。

かつては不治の病 今では7割が治療可能

白血病は白血球がガン化して白血病細胞となり、骨髄の中で増殖する病気。立ちくらみや、息切れなど貧血による体調不良、また、青あざ



発売元:博報堂DYメディアパートナーズ・小学館(908059)
販売元:東宝©2004東宝/TBS/博報堂DYメディアパートナーズ/小学館/S・D・P/MBS
写真:(左上から時計まわりに)亜紀、高校時代の朔太郎、成人後の朔太郎、律子

映画「世界の中心で、愛をさけぶ」

ゆきさだ いさお
行定 勲 監督・脚本、2004年、日本

や歯磨き時の歯茎からの出血などが初期症状だ。日本での発症率は10万人中6人位だが、高齢者や小児に多い。短期間に悪化するものを急性白血病といい、亜紀が急死した86年当時は治療困難な不治の病だったが、近年は約70%が骨髄移植（患者の骨髄液を健康な提供者のものを入れ替え、正常な血液を作る機能を回復させる治療法）と3種の薬（正常な白血球を増やす薬、抗がん剤、抗生物質）で治療可能だ。しかし治療し難いタイプであれば、05年秋に歌手の本田美奈子さんが急性骨髄性白血病で急逝したように今でも回復は難しい。

治療のキーは感染防御

抗がん剤の治療では、正常な白血球が血液1立方ミリ当たり1000個以下になり、細菌に感染しやすくなると、患者は無菌室で隔離治療を受け面会もガラス窓越しになる。この時は朔太郎の見舞いも「いつか結婚しよう」と窓越しに結婚届の用紙を示し、スキンヘッドになった亜紀とガラスを隔てて唇を重ね合うというもので、無菌室の実情に沿っている。それに反し幼い律子の手を経たテープ交換は、滅菌もされず無菌室収容中も続いたかのように描かれている点が、現実的とはいえない。

無謀な愛の結末、でも病気理解を促進

白血病患者がわざわざ感染源に近寄れば、死期を早めるのは当然だが、まさにその光景が映されるのは、朔太郎が重体の亜紀を病院から連

れ出す場面だ。——「君が思い描いた“世界の中心”オーストラリアのウルルを見せたいから、今夜、迎えに行くね」というテープを貰った亜紀は、豪雨の中を帽子にマスク、マフラー姿で朔太郎とタクシーに。台風のため混み合う空港待合室で亜紀が不調になる中、飛行機は欠航。ついに亜紀の意識が遠のくと、朔太郎は「助けて〜」と絶叫する。

高校生の一途な純愛に涙、涙のクライマックスの場面だが、これこそが亜紀を感染死させた原因に当たる無謀な行為だ。この場面の観客への影響を考えると、現在の朔太郎が当時の自分の軽率さに気付き、亜紀の死に良心の呵責を覚えるような場面もあれば一層リアルであったのに…。とはいえ、映画「セカチュー」が多くの人々の癒しにもなり、また、白血病理解の第一歩にもなったことは喜ばしい。

監修：東京通信病院 内科部長 みや
宮 ざき
崎 しげる
滋

